

モジュール2

虐待と子どもの心理

モジュール2

このモジュールでは、虐待が子どもの心理に与える影響について学びます。このモジュールで学んだことが、実際に子どもに対応していく上での基礎になります。

研修内容としては、虐待を受けた子どもの心理に関する概略的なことがらが中心になりますが、虐待の影響について知る上では、いくつかの専門的な概念に関しても基本的な理解が必要となってきます。

このため、福祉・医療機関との連携に当たり、対応チーム内での話し合いなどで必要となると思われるような概念については、本モジュールにおいても簡単な解説を添えることとしました。

虐待の影響を考える基本的視点

- 虐待の始まった年齢、続いた期間、内容による違い
 ~ 幼い頃から始まったもの、長期に続いたもの、程度のひどかったものほど、影響は深刻
- 虐待の影響を考える3つの視点
 - － 虐待環境への当然の防衛反応
 - 理解はできるが過剰な言動
 - * 激しい不信、激しいやり場のない怒りと攻撃感情、愛への激しい飢え
 - － 虐待環境での特異的な学習
 - 理解しがたい逸脱した言動
 - * 通常の発達では見られない特異な心の働き
 - － 適切な学習機会の逸失
 - アンバランスなソーシャルスキル
 - * 精神発達上のアンバランスな遅れや偏り

モジュール2

(虐待の影響を考える基本的な視点)

「虐待と子どもの心理」について研修を進めるに当たり、まずは、虐待の影響を考える基本的な視点について解説しましょう。

(始まった年齢、続いた期間、内容による違い)

子どもが虐待を受けることで被る影響は、虐待の始まった年齢・続いた期間・虐待の内容(種類や程度)によって、もちろん幅や違いがあります。幼い頃から始まったものほど、長期に続いたものほど、程度のひどかったものほど、問題は当然ながら深刻化しています。ここでは基本的な理解の仕方を述べることにします。

(3つの視点)

虐待の影響を考える上では、3つの視点が必要です。これは、モジュール1でも説明しました。

(虐待環境への当然の防衛反応)

第一に、親子関係という、本来ならば守られて愛されるべき体験がまったく逆のものであり続けた結果として、子どもは激しい不信や、やり場のない怒りと攻撃感情、愛への飢えを抱えており、それが対人関係を困難にしまいます。これは、その子の受けてきた体験を考えれば、むしろ当然のこととして理解できる問題です。同時に、よく理解はできるが、その激しさゆえに対応に苦慮させられる問題でもあります。子どもは、「トラブルは力で解決する」ということを学んでしまっているかもしれません。愛情と脅威の混ざり合った経験を通じて、子どもは親愛の表現と攻撃の表現を混同してしまいます。学級経営などで、教員が「虐待を受けてきた子どもを、あの子を軸にして集団の中に引き入れていこう」と密かに考えていた「お世話役」、「気の利く子」、「優しい子」に限って、ケガをさせられたりするのとはこのためです。そして、このことは教員をとっても悩ませることになります。年齢が上がってくると、教員に対しても暴力的な言動が見られてくることもあります。

(虐待環境での特異的な学習)

第二に、虐待という心身への破壊的な体験から少しでも身や心を守る必要上、子どもには通常の発達では見られない特異な心の働きが生み出されて、それが一見理解しがたいふるまいとなって現れるという問題です。ガツガツとした食べ方で愛情の欠如を補おうとするかもしれません。思春期では性的虐待と摂食障害が関連しているという報告もあります。過成熟(偽成熟)といって、年齢不相应なほど大人びた口調や話題を示すこともあります。対人関係のとり方も歪みます。誰にでも無差別に甘えるかと思えば、別れるときには相手に何の愛着も示さないこともあります。対人的な感情の持ち方が浅く、一貫しないのです。ですから、叱りつけて大泣きをした子どもが、小一時間もすればけろりとして甘えてきたりします(これは、教員に激しい徒労感をもたらします。)。自分自身に対するイメージも激しく傷ついており、自信を失っています。表面的には「唯我独尊」のような態度でも、少し思惑と外れた状況に置かれるとパニックを起したりします。「どうせ僕なんか!」と叫び、二階から飛び降りるパフォーマンスをくり返したりします。

(適切な学習機会の逸失)

第三に、通常ならば親子関係の中でおのずと与えられていく成長の糧が、虐待的な環境の中では与えられず、そのため精神発達上のアンバランスな遅れや偏りを強いられるという問題です。これは虐待という養育の不備によって子どもの心に与えられなかったものによる問題ということができます。

虐待を受けた子どもの発達上のリスク

- 人間への信頼感を裏切られる
- 受け入れられる限度を超えた刺激に曝される
>> 自分の能力に対する適切な理解ができなくなる
- 情緒的にかかわりが不足又は欠如する
>> 不適切な方法により他者の関心を引こうとしたり、自己の存在価値を守ろうとする
 - * 攻撃と愛着の混乱した行動パターン
 - * パワーゲーム的な人間関係

→ 周囲との間に不安定な関係を生じる

→ 自己への評価が低下する



心の発達への影響

モジュール2

(虐待を受けた子どもの発達上のリスク)

次に、虐待によって子どもの発達にどんなリスクが生じるのかを整理しておきましょう。これまでの説明と重複するところもありますが、まとめとして理解してください。

(人間への信頼感を裏切られる)

まず、子どもは人間に対する基本的な信頼感を裏切られています。

(受け入れられる限度を超えた刺激に曝される)

また、子どもの能力として受け入れられる限度を超えた刺激に曝されてきたことで、子どもは自分の能力に対する適切な理解ができなくなってしまう。

(情緒的にかかわりが不足・欠如する)

さらに、本来必要な情緒的にかかわりの不足や欠如があります。こうした不足や欠如を補おうとして、子どもはしばしば不適切な方法で他者の関心を引こうとしたり、自分の存在価値を守ろうとするのです。

例えば、虐待という親子関係は、本来ならば愛着の対象である大人から危害を被るため、子どもは愛着と攻撃を混同した行動パターンを学習してしまいます。自分のことをよく面倒見てくれる友だちに関わろうとしてケガをさせてしまうようなつきあい方をしてしまう、といった事態を招くのです。

加えて、身体的虐待の場合などは、「困ったら暴力で解決する」という人間関係のモデルにさらされて来ますので、子どももまたこうした不適切なパワーゲームの人間関係を学習していることがほとんどです。

(周囲との間に不安定な関係を生じる)

こうしたもろもろの影響によって、当然のことながら、子どもは周囲の人たちときわめて不安定な関係しかとれなくなります。

(自己への評価が低下する)

このような経験を重ねることで、子どもの自己評価も大きく低下することとなるのです。

トラウマ

トラウマという概念の理解

- 「心のケガ(傷)」という比喻とトラウマの概念

※ 精神医学的な意味での「トラウマ」は、単に「心が傷つく」ことではない

トラウマの概念

☆ 極度のストレス下では、記憶や意識に特殊な反応が起こる
(非常事態に対する緊急避難的な反応様式)

→ 強すぎる刺激や持続する非常事態では、反応の
仕方が固定してしまう

=トラウマ

モジュール2

(トラウマ)

虐待の子どもに与える影響に関する基本的な理解を基に、続いて、被虐待児の心理に関する専門的な概念について学んでいきます。はじめに、トラウマの概念について見てみましょう。

(「心のケガ(傷)」という比喻)

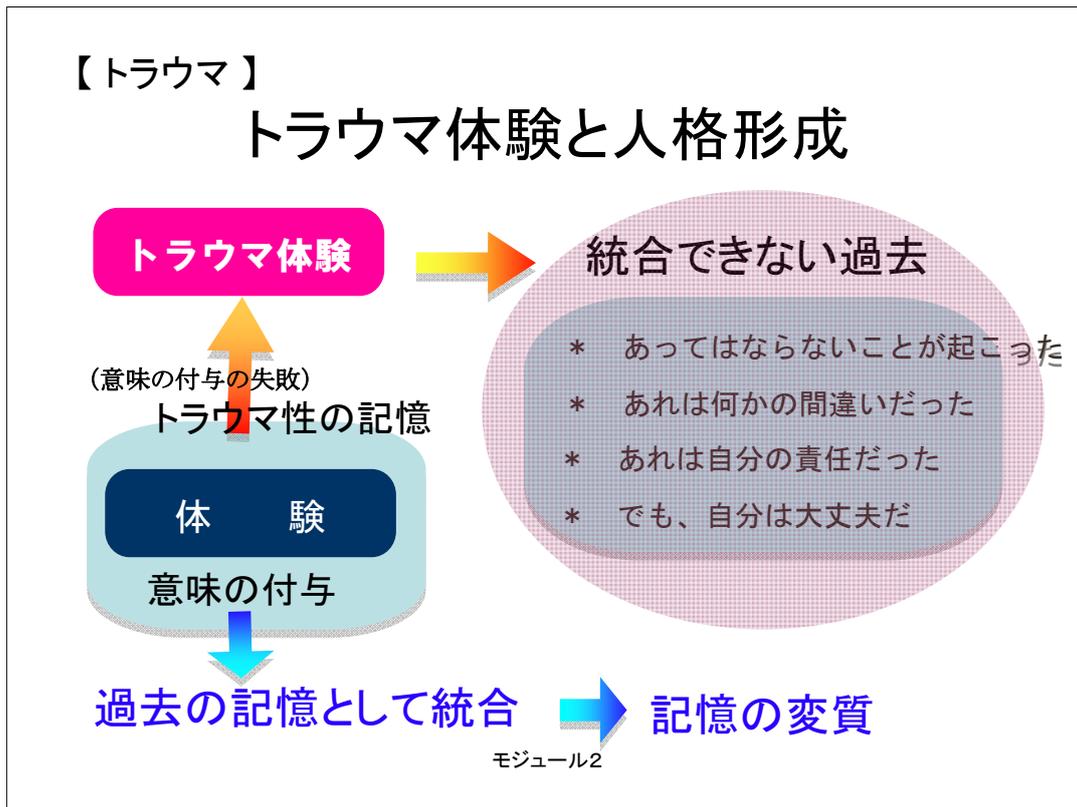
トラウマという言葉は、ずいぶん一般的にも知られる言葉になってきました。トラウマとは心のケガ、というように説明されます。もちろん、身体がケガをするように心が「ケガ」をするわけではありません。その意味で「心の傷」とか「心のケガ」という言い方はあくまで比喻です。日常的にも「失恋して心の傷を負った」とか「そんなこと言われたら心が傷つく」などの言い回しがされますが、現在、精神医学的な意味で厳密に使われる「心の傷(トラウマ)」とはそのような状態とは異なります。

(非常事態に対する緊急避難)

心身の安全が激しく脅かされたり、極度のストレスに晒されながら、それと闘ったり逃れるすべが奪われた状態に置かれたとき、記憶や意識などに、これから説明していくような特殊な反応が生じます。虐待を受けるというのは、子どもにとってまさにこうした非常事態であると言えます。

(緊急避難的な反応様式の固定)

それらの反応は、危機から心の破綻を辛うじて防ごうとする防御システムです。危機が去れば、必要もなくなって消えるはずですが、しかし、その危機状態のインパクトがあまりに強かった場合、あるいは長期にわたって反復ないし持続した場合、その反応様式が心身に焼き付いて、すでに危機は去っている状況でも出現するようになってしまいます。もともとは非常事態の緊急避難的な反応様式ですから、非常事態でもないときにそれが現れるようになると不適応的なものと見なされてしまいます。これが精神医学的な意味での「心の傷」すなわちトラウマです。



（トラウマ体験と人格形成）

トラウマ体験が人格形成に及ぼす影響について理解しましょう。

（体験に対する意味づけー過去の記憶としての統合）

人間は、自分の体験にいつでも何らかの意味づけをしようとし、これはたとえトラウマになってしまうほどに激しく苦痛に満ちた体験であったとしても同様です。もし、こうした意味の付与がうまくいけば、体験は過去のものとして心の中にきちんと位置づけられていきます。やがて時間の経過とともに記憶は変質し、痛切な感情もだんだんに事実の記憶からは引き離されていき、その記憶によって心をかき乱されることもなくなっていくでしょう。

（意味づけの失敗ートラウマ性の記憶）

しかし、こうした適切な意味づけに失敗してしまうと、トラウマ体験はトラウマ性の記憶として、心の中の異物になります。この異物は、いわば統合することのできない過去として、心の中に残り続けるのです。

こうしたトラウマ性の記憶をもったまま人格形成が進む場合、人間はトラウマ体験の記憶だけを切り離して、残りの部分だけで人格を保とうとします。

意味づけの失敗とは、まず、「あってはならないことが起こった」、「あれは何かの間違いだった」というような、事実の否認や矮小化です。

（統合できない過去）

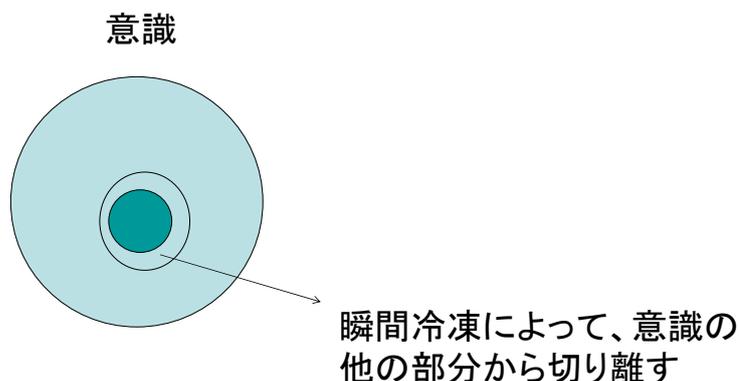
さらに、子どもは自分の身に起こった出来事が、自分の責任であったと考えるようになっていきます。乳幼児期の子どもはおしなべていいことも悪いことも自分に原因があると思う発達特性を持っていますし、虐待をする親はたいていの場合子どもに対して「お前のせいだ」というメッセージを送るものなのです。

このような自罰的な気持ちを常に自覚しては、子どもはとても平静でいられません。そこで、子どもはウルトラCを試みます。「でも、自分は大丈夫だ」という防衛をして、トラウマ性の記憶や体験を異物のまま無視しようとするのです。

【トラウマ】

トラウマ体験

- トラウマは、心の中の「異物」(西澤 哲 1999)



モジュール2

(トラウマは、心の中の「異物」)

先に、トラウマ体験を「異物」という言葉で説明しました。この点について少し補足説明をしておきましょう。

「異物」という言葉は、心の他の部分と混じり合ったり、融け合わされてひとつのものになることがないという意味です。引越しのたびに、中を開けないで段ボールのまま移動する荷物を想像してください。その荷物はいつでも押し入れの奥にあります。そのせいで、押し入れの使い勝手はとて悪くなります。しかし、中を開ければ整理するのにとんでもなく手間がかかり、もしかすると、忘れてしまいたいと願っていた思い出さえよみがえって苦痛を再体験するかもしれません。そう思うと、結局未整理のままで段ボールという形で存在し続けることになります。これが、心の中に「異物」として残ってしまったトラウマなのです。

この点について西澤 哲氏の解説が非常にわかりやすいので引用しましょう（「子どものトラウマ」西沢哲著 1997年）。

「トラウマとなるような体験が意識されます。これは適切に処理することができないほどに強烈で苦しい意識です。すると、意識はこの体験から自らを守ろうとして、その体験を瞬間冷凍してしまいます。」

「瞬間冷凍は、その体験に関連している感情や記憶をすべて一緒に凍らせません。その結果、意識はもうその体験の影響を被らなくてもよくなるのです。」

極度のストレスに対する反応

3つの反応

①意識の障害

～ 解離による症状

②記憶の障害

～フラッシュバック、侵入性思考

③覚醒水準の異常

～覚醒水準の低下／上昇

モジュール2

(極度のストレスに対する反応)

続いて、極度のストレスを受けた子どもの反応として、どのような現象が生じるかについて見ていきます。

特に、重要なものとして、意識、記憶、覚醒水準のそれぞれのレベルでの反応があります。

(意識の障害)

まず第一に、意識の障害です。トラウマ体験を瞬間冷凍し、感情や記憶を封じ込めてしまった「解離」の状態にある子どもは、心身の統一が崩れて、さまざまな意識の障害を来すことが多くあります。

(記憶の障害)

第二に、記憶の障害です。具体的にはフラッシュバック、侵入性思考などの形で現れます。何らかの理由で瞬間冷凍された体験が解けたときに、凍り付いていた記憶の一部が、非常に生々しいかたちで心に侵入してくるのです。不快な思考やイメージが頭の中に繰り返し、何度も侵入してきたりもします。

(覚醒水準の異常)

第三に、覚醒水準の異常です。覚醒水準とは、外界の刺激に対する感度や反応性のレベルのことであり、虐待環境は、この覚醒水準の過剰な低下や上昇を子どもに学習させてしまうことになります。

以上の3つレベルの反応のそれぞれについて、さらに詳しく見ていきましょう。

【 極度のストレスに対する反応 】

①意識の障害

解 離

解 離

意識、記憶、同一性、環境への知覚と
いった、通常ならば統合されているはず
の機能が破綻している状態

※ 解離の状態にあっても、トラウマ体験の記憶は、
なくなるわけではない（「ないことにされる」だけ）

モジュール2

（解離）

極度のストレスを受けた子どもが示す意識の障害を理解する上では、「解離」という心の状態に注目する必要があります。

解離は、「意識、記憶、同一性、環境への知覚といった、通常ならば統合されているはずの機能が破綻している状態」として定義されます。いわば、自分が自分であると自信を持って感じる事ができるための素材がバラバラに散乱してしまっているような状態です。

トラウマ体験の意味付けに失敗すると、子どもにとってトラウマ体験の記憶はそれ以外の記憶と統合できなくなってしまうことはすでに述べました。こうした記憶をなんとか統合しようと努力するのではなく、とりあえず自分の心がバラバラになってしまいうことを避けるために解離が生じるのです。

（記憶はなくなるしない）

解離が生じるということは、その体験や記憶が心の中からなくなってしまうことではありません。そこにあるにもかかわらず、ないことになってしまう、ということです。ですから、なんらかのきっかけで、封印していたトラウマ記憶が蘇れば、その体験をしたときのままの感情も同時に蘇ることになります。

【 極度のストレスに対する反応 】

①意識の障害

解離による症状

- ・ 授業中でも、空想世界の中に入り込んでしまう。
- ・ 先生から叱られたりすると目がうつろになり、あくびをしたり、意識がもうろうとしてくる。
- ・ 今までニコニコしていたかと思うと、突然目つきが変わるなど、人格状態が急激に変化することがしばしばある。

脳が目に見える器質的損傷を受けたわけではないが、
心身の統一が崩れて記憶や体験がバラバラになる
(杉山登志郎 2006)

モジュール2

(解離による症状)

解離が生じている子どもは、さまざまな症状が出てきます。

たとえば授業中でも自分の空想の世界に入り込んでしまい、さながら白日夢でも見ているような姿を示します。

また、先生から叱られたりすると、突然意識がもうろうとしてきたりします。あとで思い出そうとしてもそのときの記憶がないと主張することもしばしばです。

あるいは、ニコニコしていた子どもが突然人が変わったように怒り出したり不機嫌になったりといった症状の場合もあります。

(心身の統一が崩れた状態)

これらはすべて、目に見える器質的な障害によって起きているのではなく、子どもの心身の統一が崩れてしまって記憶や体験がバラバラになっていることの表れなのです。封印されていたトラウマが何らかのきっかけで蘇れば、子どもはそのトラウマ体験をしていたときの認知や感情に突き動かされます。しかし、再び封印に成功すれば、その記憶はなかったことになってしまうのです。何か、自分のトラウマ体験につながりそうな刺激に出会うと、子どもは現実の世界から遠ざかろうとしたり、突如として反応の仕方を変えたりすることで、なんとかトラウマ体験の記憶に直面することを避けようとしているのです。

【 極度のストレスに対する反応 】

②記憶の障害

フラッシュバック・侵入性思考

統合できない記憶

凍結した記憶の突然の「解凍」 → フラッシュバック

あり続けるトラウマからの干渉 → 侵入性思考

記憶のネットワーク化と「問題行動」の拡散

※ ト라우マによる傷はトゲの残った「刺し傷」

モジュール2

(記憶)

解離という現象を理解できると、フラッシュバックや侵入性思考と呼ばれる、トラウマ体験をした子どもに特徴的に見られる現象も理解できるようになります。

(統合できない記憶の処理)

記憶とは、通常、時と共に感情から切り離され、事実経過だけが心の引き出しにしまい込まれるものです。「昔は、思い出すだけでも怖かった。でも、今はなんともなくなった」…そんな体験はありませんか？

ところが、トラウマ性の記憶では、こうした「変質」と「統合」が起こりません。通常の記憶は「意味」を通して覚えるところが大きですが、トラウマ性記憶はナマの映像や身体感覚がじかに頭に焼きつく直接記憶です。ですから生々しい実感性を持つ一方で、「言葉（意味）」として表現するのは難しいことになります。

(記憶の突然の「解凍」－フラッシュバック)

高校の修学旅行の夜、友だち同士でちょっとエッチな話に興じていた時、突如として胸の痛みを訴えてパニック状態になった少女がいました。これが、彼女が幼児期に受けていた性的虐待の「フラッシュバック」でした。フラッシュバックとは、何かのきっかけで、封印していたトラウマ体験や記憶が解凍されて蘇ることです。フラッシュバックが起こることを子ども自身は予想もしていませんから、その現れは本人にとっても周囲にとってもまさに唐突です。教師はごく普通にとっさの注意を与えたつもりでも、子どもは不意にかけられた叱責の言葉によって父親から受けてきた虐待経験が蘇り、パニック状態になったりするのです。

(あり続けるトラウマからの干渉－侵入性思考)

しつこいようですが、解離された体験や記憶は心の中から消えてしまうわけではありません。それどころか、意識や人格に統合されないままですから、「このままでいいのかい？」と自己主張をするかのように、機会さえあれば意識や人格の中に入り込もうとします。これが侵入性思考と呼ばれる現象です。子どもは、自分では思い出そうともしないし、考えたくもないと思っている考えやイメージが、頭の中に忍び込んでくるような感覚にとらわれます。居眠りなどをして意識の水準が下がると、現実と区別のつかないような悪夢としてイメージが蘇り、突然騒ぎ始めるといったこともあります。

(記憶のネットワーク化と「問題行動」の拡散)

解離によってトラウマ体験を処理している心は、トラウマ体験が蘇らないように常に監視をしています。これは、感度の良すぎるアラーム装置のようなものです。警戒が過ぎる結果、本来の「危険の源」だけではなく、それに類する刺激や少しでも似たところがある刺激のすべてに反応するようになってしまいます。これが記憶のネットワーク化、と呼ばれる現象です。父親からの罵声への恐怖が、男性の大声全般への恐怖になり、やがてはクラスのみんなの笑い声にも広がって教室に入れなくなる、といった「問題行動の拡散」とも言うべき事態が起こってくるのです。

(トラウマによる傷は「刺し傷」)

トラウマによる心の傷はトゲの残った「刺し傷」です。擦り傷や切り傷であれば、「そのままにしておけばいつか治る」かもしれませんが、刺し傷は、たとえ表面の皮膚が再生したとしても、トゲは中に残り続け、痛みを与え続けます。トゲを抜かない限り完全に治ることはありません。ところが、トゲを抜くのはとても痛いのです。だから、子どもは中に残ったトゲによる痛みを最小にしようとして不自然な対人関係や情緒に陥ります。それがトラウマを受けた子どもの人格形成の特徴なのです。

【 極度のストレスに対する反応 】

③覚醒水準の異常

覚醒水準の低下／上昇

- 虐待環境は覚醒水準の過剰な低下や上昇を子どもに学習させてしまう

* 覚醒水準の低下

～ 注意力や意欲の鈍さ、活動性の乏しさ、抑うつ傾向など

* 覚醒水準の上昇

～過敏性、活動性の過剰さ、睡眠障害 など

モジュール2

(覚醒水準)

覚醒水準とは、外界の刺激に対する感度や反応性のレベルのことです。逃れようもない危機に襲われたとき、覚醒水準を下げることで耐え忍ぶという心の働きが起きます。感覚を鈍らせ、注意力や現実感を低下させ、活動性も下げ、一種の麻痺に近い状態で危機が過ぎるのを待つという防御のシステムです。ちょうど、茫然としたまま身を縮めて嵐が頭の上を過ぎるのを待っているイメージに近いと考えられます。

一方、覚醒水準を上げることで危機に備えるという心の働きがおきることもあります。感覚を尖らせ、注意力を高め、活動性も亢進させて、少しでも積極的に危機に対処しようという防御システムです。ちょうど、警戒に心を張りつめ、嵐に向かって身構えているイメージに近いでしょう。自分が置かれている状況と覚醒水準が合っていれば、人は周囲からの刺激に対して適切に反応することができます。

(覚醒水準の異常)

しかし、これらの防御システムは、持続的で反復的な虐待に対しては役に立ちません。モジュール1でも述べた通り、虐待環境とは、子どもにとって自分の能力や努力ではコントロールすることのできない環境なのです。嵐は通り過ぎないし、身構えてもなぎ倒されてしまいます。それでも、覚醒水準を調節して事態に対処しようとする反応は、危機に対して自動的に生まれてきてしまいます。その結果、覚醒水準の過剰な低下が、子どもにとって習性になってしまうことになります。

(覚醒水準の過剰な低下)

覚醒水準を下げようとする働きが前面に出れば、注意力や意欲の鈍さ、活動性の鈍さ、抑うつ傾向などの行動傾向が現れてきます。

(覚醒水準の過剰な上昇)

覚醒水準を上げようとする働きが前面に出れば、過敏性、活動性の過剰（多動、落ち着きのなさ）、睡眠障害などの行動傾向が現れてきます。

(ADHDとの類似性)

ひとりの子どもに両者が入り混じっていることもあります。お気づきでしょうか？今ADHDと呼ばれている子どもにとっても似てくる、ということなのです。もちろん、ADHDと呼ばれる子が虐待を受けている子だなどと言っているわけではありません。ただ、ADHDという言葉だけが一人歩きをしてしまうことは危険です。似たような行動傾向が、もしかすると虐待によって生じているかもしれないという可能性を頭の中に入れておいていただきたいのです。

PTSD(心的外傷後ストレス障害)

- 阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件で知られ始める
- もともとは「一回性のトラウマ体験」についての概念
- 今も研究され続けているテーマ

モジュール2

(PTSD)

次に取り上げるのは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の概念です。

PTSDという言葉はずいぶん一般的に使われるようになってきました。おそらく、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件によって知られるようになったのだと思います。虐待による影響の説明と重複する面はありますが、よく使われるようになった言葉を正確に理解しておくという意味で、簡単に説明しておくことにします。

PTSDという概念はもともとは「ただ一度の強烈な体験による後遺症」という枠組みで作られたものです。ですから、虐待のように、何度も何度もトラウマ刺激にさらされてきた子どもの状態の説明としては、必ずしも当てはまらないところもあるかもしれません。しかし、人が自分の能力だけでは処理しきれない体験にさらされたときにどうなるのかということを理解する上ではたいへん重要です。

PTSDの研究は、現在進行形です。これからもその概念は見直され、精緻化され続けていくでしょう。ここでは、おおよそのところを説明していくことにします。

【 PTSD 】

PTSDという概念の骨格

○ ト라우マの再体験の繰り返し

○ 刺激の回避、全般的な反応性の低下

～ ト라우マに関連する刺激を避けようとしたり、全般的な刺激への反応性の低下が見られる

○ 持続的な覚醒亢進

～ いつも周囲の刺激に過剰な警戒をしている「覚醒亢進」の状態が続く

モジュール2

（PTSDという概念の骨格）

PTSDという概念の骨格になっているのは、次の3つの症状です。

（トラウマの再体験が続く）

第一は、トラウマとなった出来事のあとでも、そのときの恐怖や苦痛といった感情が何度も再体験され続けているということです。「もう済んだことだから忘れなさい」と人に言われても、なかなかそうはいかない状態になってしまうのです。

（刺激の回避）

第二は、そうした再体験の辛さも手伝って、トラウマに関連するような刺激を毎日の生活の中で何とか避けようとし始めることです。ところが、何かひとつ刺激を避けようとする、今度はその刺激につながる別の刺激も避けなければならなくなります。まるで連想ゲームをしているように、トラウマに関連する刺激はふくらんでしまいます。その結果、生活の中で与えられる刺激全般に対して反応が鈍くなってしまったりします。

（持続的な覚醒亢進）

第三は、覚醒亢進と呼ばれる状態で、いつも周囲の刺激に過剰な警戒をしているような心のあり方です。

【 PTSD 】

PTSDの現れ

- **トラウマの再体験は、「思い出し」ではなく、
今まさにそのままの体験をしているということ。**

〔 → 再体験を重ねても、慣れることはなく、
ますます頑なで歪んだ防衛反応が繰り返される。 〕

☆「刺激の回避・全般的な反応性の低下」がもたらすもの

～ 外への現れ方 ; 黙り込んでしまう、思い出せない など
～ 外からの見え方; 意欲がない、極端に無表情 など

☆「覚醒亢進」がもたらすもの (ADHDの現れとも類似)

～ 全方位に向けた過剰な警戒 → 結果的に無警戒と同じ
～ 刺激に対する過剰な驚き、興奮 → 注意の持続・集中が困難

モジュール2

(PTSDの現れ)

それでは、PTSDの症状は、具体的にどのような現れ方をするのでしょうか。
(トラウマの再体験は「思い出し」ではない)

トラウマの再体験という症状は、すでに説明した侵入性思考などもそれに当たります。

子どもが幼ければ、自分が何を怖がっているのかの説明ができないこともしばしばです。大切なことは、これは単に昔の経験を思い出しているという状態ではなく、今まさにそのままの体験をしている、ということだということです。ですから、回を重ねていけばそのうち慣れてくるだろう、といった楽天的な考え方はいられません。何度も何度も再体験していくうちに、子どもはますます頑なで歪んだ防衛反応をくり返し、適応度を下げていってしまうことにもつながるのです。

(刺激の回避がもたらすもの)

刺激の回避という症状は、「黙り込んでしまう」、「思い出せない」といった現れ方をします。特定の場面、人、活動といった刺激に対する回避であればわかりやすいですが、これが全般的な反応性の低下になってくれば、「生活意欲がない」「参加意欲がない」といった見られ方をようになります。甚だしい場合には、まるで感情そのものが麻痺してしまったかのように無表情になっていくこともあります。

(覚醒亢進がもたらすもの)

覚醒亢進という症状は、いわば、自分の生活の全方位に対する過剰な警戒という状態です。なんとも皮肉なことですが、たったひとりで360度の全方位を警戒しようとするれば、結果的にほとんど無警戒であるのと同じ、という状態になってしまいます。私たちは適切な予測ができるからこそ効果的な警戒ができるのであって、「いつでもどこでもすべてを警戒」などということとはできないのです。そのような無理をしている状態が覚醒亢進です。ですから、この症状が現れると、ちょっとした刺激にも過剰に驚いたり、些細なことですぐに興奮したり、注意を持続したり集中したりすることが困難になったりします。症状だけを見ると、ADHDと呼ばれる状態にたいへん似てくるのです。

以上、PTSDの概念は、ここまで説明してきた虐待の影響と非常によく似た考え方であることが理解していただけたと思います。

反応性愛着障害

(乳幼児期からの被虐待児にしばしばみられる)

- 愛着は「人を信頼できる人生」の基盤

愛着障害

生後5歳未満までに親やその代理となる人と愛着関係がもてず、人格形成の基盤において適切な人間関係を作る能力の障害に至ったもの

- ※ 抑制型 — 他者に対して無関心を示すことが多い
- ※ 脱抑制型 — 他者に対して無差別的に薄い愛着を示す

モジュール2

(反応性愛着障害)

虐待を受けた子どもの特徴を理解する上で、解離と並んで理解しておく必要があるのが「反応性愛着障害」という概念です。

(愛着は「人を信頼できる人生」の基礎)

乳児期の子どもは大人に対して圧倒的に無力です。大人の保護なしには生存すらできません。ですから、子どもは特定の大人に対して強い情緒的な絆を結び、その大人に守られながら人生の船出をします。この絆が愛着と呼ばれます。子どもは、適切な愛着を獲得することで、「他の人を信頼しても大丈夫なのだ」という人生観の基礎を創り上げるのです。

(愛着障害の概念)

愛着障害とは、このような人間関係の基盤形成に失敗した状態です。それは単に、いま目の前にいる人が嫌いだというレベルの問題ではなく、そもそも他の人への信頼を築くという能力そのものへのダメージなのです。

「反応性愛着障害」は、こうした愛着の障害が、知的発達遅れとか、自閉症に代表されるような発達障害などの要因によるのではなく、病的に不適切な養育の影響により、そうした養育環境への反応として現れたものです。

(抑制型と脱抑制型)

反応性愛着障害には抑制型と脱抑制型があります。

抑制型は、対人関係のうまくいかなさが、内にこもる方向で極端に示されているもので、学校生活では「ひとりでも平気」、「いじめられても無抵抗」、「他者に対して無関心」といった特徴になって現れます。いわば、自分を押しさえ込んでしまう方向で愛着障害が現れてくるものです。

これに対して脱抑制型とは、表面的には社交性を示す場合で、相手を構わぬなれなれしさや、相手に対する感情表現の不安定さといった特徴になって現れます。自分の言動を社会的に適切な範囲で調整することができないという方向での現れと考えていいでしょう。

虐待から生じうるその他の問題

- 死亡
- 身体的・知的なハンディ
- 人格形成における虐待の影響の固定化
～ 境界性人格障害、解離性同一性障害、転換性障害
など
- 食行動異常(摂食障害)

モジュール2

(虐待から生じうるその他の問題)

これまでに述べてきたような人格形成上の影響の他にもさまざまな影響が考えられます。

(死亡)

死亡してしまうというのは最悪の結果です。幼稚園や小学校低学年など、子どもの年齢が低く、親との力関係が圧倒的に弱い時期には、死亡を防ぐということが最重要の課題になります。

もちろん、子どもが中学生に達していてもこの危険は伴うことを忘れてはいけません。平成15年の大阪府岸和田市における児童虐待事件では、中学3年の男子が虐待を受け、生命に危険が及ぶ状態で発見されています。

(身体的・知的なハンディ)

また、例えば骨折等の影響により身体に障害が残ったり、頭部への直接的な打撃の結果として知的な障害が生じることもあります。学習を支援し、強化する環境がなかったために、学力の低下が二次的に起こるといったことは、それ以上によく見られます。

(境界性人格障害、解離性同一性障害、転換性障害)

さらに、虐待の影響が固定化されてしまった結果として、すでに見たPTSD等のほかにも、さまざまな心の問題や疾患を抱えることとなるケースがあります。心の不安定さや急激に変化しやすい感情を特徴とし、自傷行為や自殺未遂を繰り返すことも多い「境界性人格障害」、いわゆる多重人格の状態をもたらす「解離性同一性障害」、精神的につらい出来事が引き金となり、身体症状(例えば、声が出ない、手足が動かないなど)に置き換えられて発症する転換性障害などが、その例です。

(食行動異常(摂食障害))

思春期に入る頃から、過食や拒食といった摂食障害が見られ始めることもあります。

これらの人格障害、摂食障害等を起こしている子どもが、すべて虐待を受けているということではもちろんありませんが、虐待による慢性的な愛情飢餓や自己評価の低下を補おうとした結果として、これらの障害につながる場合が少なくないことも念頭に置いて下さい。

休眠効果という考え方

休眠効果 (sleeper effect)

子どもの時のトラウマの影響は、必ずしもすぐに出てくるとは限らない

- ※ すべての影響が出揃うのは大人になってから
- ※ とりあえず、マイナスの影響が出ていないからといって、将来的にも問題ないとは言い切れない

モジュール2

(休眠効果という考え方)

子どもの発達や人格形成に対する虐待の影響を考えていく場合、休眠効果と呼ばれる現象の理解が大切です。これは、子どもの時に受けたトラウマ体験は必ずしもすぐに影響が出てくるとは限らない、という現象をさした言葉です。すべての影響が出そろうのは大人になってからであり、とりあえずマイナスの影響が出ていないからといって、将来的にもなんら問題はない、とは言い切れないということになります。

この考え方は、とりわけ、家庭から分離され、児童養護施設などに入所し、今は安定した生活の場から登校してきている子どもに対応する教員などにとって重要な視点です。今現れている逸脱行動だけが問題なのではなく、その子の生育歴から想定されるリスクを念頭に置きながら、じっくりと治療教育的に関わり続けることが大切です。ただし、こうした取組を可能にするには学校単独では困難であることも多く、ケースバイケースでのチーム対応が必要になります。

最後に

子ども理解のために…

- 子どもは突き動かされている
- 教職員の無理解が二次的障害にもつながら
- 教職員が救済者幻想 (Savior's Fantasy) に陥る危険性もある
- 教職員もトラウマを受ける

モジュール2

(子ども理解のために…)

最後に、あらためて虐待を受けた子どもを理解していく上での留意点をまとめます。

(子どもは突き動かされている)

まず、子どもはトラウマという圧倒的な力の前で、突き動かされているのだと理解することです。「へらへらしていると思ったら突然キレる。さんざんキレた後で話を聞けば覚えていないという。なんて勝手な奴だ」とか「都合の悪いことは全部忘れたふりをする」といった理解に陥りがちですが、その子の育ってきた歴史の中に、深刻なトラウマ体験がなかったかどうかを丁寧に判断していただきたいのです。

(教職員の無理解が二次的被害にもつながら)

虐待を受けた子どもが抱える問題や障害の特性への無理解は、状況のさらなる悪化をもたらすおそれもあります。教職員の不適切な対応が、ときに問題行動を助長したり、二次的障害を引き起こしたりするという事実から目を反らしてはなりません。

(救済者幻想 (Savior's Fantasy) に陥る危険性)

一方、子どもが虐待を受けてきたという事実がわかっていくと、逆に、教師はあまりにも痛々しいその子の生育歴に同情し、その子が逸脱した言動を示しても「仕方がない」と考えられるようになります。これが行き過ぎると、どんなに不適切な行動をしても「仕方がない」と判断してしまいかねません。「世界中があなたを悪いと言っても先生だけはあなたの味方よ」という態度はすばらしいものですが、一方では、社会的な逸脱行動をくり返して損をするのはその子自身です。背景要因への理解がありすぎて、子どもに対し現実感のある対応ができなくなってしまうのでは、かえってその子のためになりません。

虐待を受けた子どもへの対応に当たる中では、このように、自分が唯一の救済者だという幻想 (Savior's Fantasy) に陥るおそれがあります。こうした危険性についても十分認識した上で、子どもに対し適切な支援を行っていく必要があります。

(教職員もトラウマを受ける)

このように、虐待を受けた子どもと接していけば、教職員も大きなストレスにさらされます。ときには教職員として、人間として、トラウマになるような体験もしてしまうことがあります。この点は、教職員も自身のメンタルケアについての理解を深めていくことが必要です。

以上、このモジュールでは、虐待を受けた子どもの心理について解説してきました。学校でこれらの子どもに実際に対応するときの留意点等については、さらに、モジュール8などで見ていくこととします。